

## 伝統を創造する女性たち：酒田の傘福復興事業と地域学／地元学

坂元，一光  
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7378075>

---

出版情報：国際教育文化研究. 12, pp.1-15, 2012-06-29. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



## 伝統を創造する女性たち

—酒田の傘福復興事業と地域学／地元学—

坂元 一光

### はじめに

平成 24 年の「酒田祭り」(注 1) は五月晴れにめぐまれた。華麗な飾り付けをほどこした山車が市中を練り歩き、多くの山車には色とりどりの和裁細工を吊るした「傘福」が揺れていた。その年の「頭屋」が神事や供応を勤めるために準備された詰所「神宿」にも、地域から集められた珍宝名器の「飾りもの」とともに地元の傘福が吊るされていた。酒田祭りに登場する傘福を見る限りそれはすでに当地の伝統工芸としての趣を漂わせている。この傘福がさらに存在感を増すのは 2 月下旬から 1 ヶ月以上にわたり開催されるひな祭りイベントの期間だろう(注 2)。傘福は春のひな祭りイベントで長期間にわたり展示され酒田市の新しい伝統的シンボルとして浸透しつつある。傘福はイベント期間中「山王くらぶ」(旧料亭「宇八」)をはじめ、観光客の目に触れやすい駅や空港のロビー、その宿泊先であるホテルや旅館、そして土産物を販売する観光施設や商店街にも飾られ、酒田市全体で華やいだ季節イベントの演出に供されている。

酒田の季節を彩る地域の行事や祭りに傘福のすがたを見るようになったのは実はここ 6～7 年のことである。現在の傘福は酒田商工会議所女性会が設立 25 周年記念事業のなかで「地域の伝統文化の次世代継承と観光振興」を目的に二系統の伝統的傘福を融合させて作り出した和裁細工である。近年、市民や観光客の目に触れるこの伝統の装いを帯びた傘福は、その事業の成果であり新しい創造物である。そしてこの創作された吊るし飾りを前にする市民や観光客は、地域のこれまでの傘福の伝統が新しい時代状況に合わせてプロデュースされ更新される現場に居合わせているといえるのだ(注 3)。

本論では酒田商工会議所女性会の観光振興事業において二系統の傘福伝統が融合させられ新しい「平成傘福」が再構築される過程を明らかにする。また当該事業をすすめるなかで取り組まれるようになった二系統の伝統的傘福に関する調査活動に注目し、観光振興事業と実証的地域研究のあいだを往還する女性会の眼差しや活動が、地域・地方再生のための住民参加型の地域学／地元学へと変貌していく過程を指摘する。

以下の本論の記述にあたっては多様な姿をとる傘福による混乱をさけるために近年新しく創造された傘福を「平成傘福」、その由来となった昔ながらの傘福を「伝統傘福」として便宜的に

呼び分けることにしたい。

## 1. 女性会と傘福復興事業

平成傘福の誕生は酒田商工会議所女性会による傘福事業を抜きに語ることはできない。酒田商工会議所の女性会は女性経営者の社会的地位の向上と地域商工業の発展・振興、社会福祉に貢献することを目的に商工会議所の下部組織として昭和 55 年に設立された。女性会はまた全国商工会議所女性会連合会、山形県商工会議所女性会等の関連組織ともネットワークを構成している。平成傘福はこの女性会の事業のなかから生み出された地域文化由来の新しい手工芸である。傘福事業は女性会の 25 周年を記念し、地域資源の発掘による観光振興を目的に平成 17 年に女性会会長（白旗月美氏）の発案によって立ち上げられた。事業では伝統傘福の文化的価値の再評価とその復興、活用による観光資源化による地域振興が目指された。初年度の取り組みはまず地域文化としての傘福の復興であり、その成果は「旧山王くらぶ」での第 1 回傘福展示会として結実する。女性会では関連書籍などを参考に傘福の見本や型紙を準備し、県内の女性会、市民ボランティアに制作協力を呼びかけた。平成 17 年 8 月から計 12 回の講習会を開催、翌 3 月までに 6000 個あまりの細工物を制作し、春の観光イベント「酒田の雛めぐり」（平成 12 年から始まる広域観光事業「庄内ひな街道」のひとつ）の一環として展示された。その後も女性会は傘福事業を継続し、平成 24 年には第 7 回目となる展示を行った。傘福展示は同一展示の繰り返しではなく、毎年特色を出すよう配慮されリピーターを飽きさせない努力がなされている。たとえば酒田で「日本三大吊るし飾りサミット」が開催された第 5 回展示（平成 22 年）には山形の県花である「紅花」で染めた傘福を制作、展示し、第 6 回展示では同市大宮町の白鳥神社に奉納された古い絵馬に描かれた傘福を復元、展示している。さらに第 7 回展示においては酒田市全域にわたる傘福調査のパネル展示が行われた。毎年の展示企画のみならず、この間、女性会は傘福制作部門の創設、傘福の商標登録化、小中高校での制作体験指導、あるいは伝統傘福の調査研究や修復活動など様々な方面に事業の幅を拡大していった。こうした傘福事業の活発な展開は傘福に対する深い愛着とその普及に情熱をそそぐメンバーの積極的で内発的な取り組みの姿勢により支えられている。

## 2. 二つの連携事業

平成傘福に関してはその誕生に深くかかわる地域を越えたふたつの連携事業を指摘することができる。ひとつは傘福の集中的展示の機会を提供する広域観光事業「庄内ひな街道」あるいは「日本海ひな街道」であり、もうひとつは吊るし飾りあるいはその習俗を共有する三つの地域で文化交流や観光振興を進める「吊るし飾りサミット」連携事業である。ふたつの連携事業は女性会の傘福事業の内容や展開、あるいは当事者たちの実践や考え方に様々な影響してきたと考えられる。

「酒田の雛めぐり」はその年度の事業成果を示す重要な機会である。そこでは来場者から展示に関するさまざまな評価のフィードバックが得られ、次の活動に反映される。平成 9 年から行われている「酒田の雛めぐり」は女性会が山形県の「地域づくり事業」の助成をうけて元料

亭「相馬屋」で開催した「酒田のひな祭り」がきっかけとなった。現在、この「酒田の雛めぐり」は秋田から山形、新潟にいたる日本海沿岸地域の広域観光圏イベント「日本海ひな街道」のひとつの企画に組み込まれており、「にかほひな街道」（秋田県仁賀保）、「越後ひな街道」（新潟県村上市）とともに「庄内ひな街道」のひとつの観光拠点に位置づけられている。（庄内観光コンベンション協会パンフレット）

平成傘福は当初、傘福が柳川や稲取と同様、ひな祭りに関連する伝統的な飾り物であり、華やかな雛人形に添えるにふさわしい飾り物と考えられていた。ひな祭りと傘福の関連性について議論の分かれるところだが、そうした歴史・民俗学的な議論をしり目に、平成傘福は毎年のひな祭りイベントの期間に合わせ展示されるようになった。伝統傘福の歴史・民俗学的理解の是非はともかく、少なくとも現在の平成傘福は「酒田の雛めぐり」というひな祭り行事にちなんだイベントの舞台を与えられることで発展してきたといえる。またひな祭りの舞台に傘福を添えるという発想の背景には、かつての「相馬屋」での女性会による初のひな祭り展の開催もあったと推測される。

一方、三地区連携の「日本三大吊るし飾りサミット」も平成傘福の成立や展開に深く関わる事業である。とりわけ平成傘福誕生後に見られる事業の様々な新しい展開、たとえば地域学的な調査研究への着手等、において重要な役割を果たしてきたように思われる。「日本三大吊るし飾りサミット」は平成 19 年東伊豆温泉観光協会によって呼びかけが行われた。当時、全国公募により温泉観光協会の事務局長に就任した渡辺法子氏は吊るし飾りの伝統を持つ柳川、稲取、酒田の三つの地域が、相互に連携を深めこれを貴重な観光資源として活用するためのネットワーク構築を仕掛けた。サミットは平成 20 年 2 月の稲取での開催を皮切りに翌年 3 月には柳川で、平成 22 年 3 月には酒田において開催された。第 4 回目の東京での吊るし飾りサミットは日本の中心都市東京から三地域の吊るし飾りの情報を発信することを目指して、都内の目黒雅叙園において開かれ、九州、東海、東北間の地域連携事業にひとつの区切りが付けられた。サミットでは観光関係者や行政担当者により各地域の吊るし飾り観光の現況報告や意見交換、交流などが行われている。それは傘福事業に対しても直接的、間接的に刺激を与えてきた。たとえば後の傘福調査の契機となる傘福の習俗的な位置づけの検討や都内有名デパートや歴史施設からの展示依頼、サミット担当年の特別展示企画（地元名産の「紅花」で染めた傘福制作）等、おそらく一地域の単独事業では実現しない事業展開であったと考えられる。

### 3. 平成傘福の創造過程

平成傘福は観光振興のためにひな祭りイベント等と結び付けられその伝統的形式をもとに新しく創造された工芸品である。平成傘福の特徴はまず吊るし飾りを吊るす傘にある。これが柳川、稲取の吊るし飾りとの大きな外観上の違いとなっている。和傘の縁に短い幕をたらし傘の骨から数十個の和細工を吊るしさげる。吊り下げる和細工は豊穡や子宝祈願、富貴にちなんだ縁起物が主である。平成傘福には元になった伝統の吊るし飾り（伝統傘福）が存在している。それらには「祈願系」と「祭礼系」の二系統があることが指摘されており（工藤幸治氏談）、前者が安産や子どもの無事成長を祈って寺社に奉納された吊るし飾りで、後者は山王祭りの山車

(亀笠鉾)に据えられた宝づくしの傘鉾飾りである。とくに後者はそのミニチュアの傘鉾がかつての大地主や豪商、網本など富裕層の旧宅から発見されており、その豪華な意匠から家格や富の象徴として職人に作らせた吊るし飾りと考えられている。女性会ではこれら二系統の吊るし飾りの伝統に依拠しながら、また他地域の吊るし飾りや手芸細工のテキストなども参考に、現在のような市民・観光客向けの新しい傘福を創造した。地元の伝統的傘福／傘鉾を参考に材料や形式など女性好みの嗜好や現代的要素を融合させて平成傘福は生み出された。しかし、ここで重要なことは事業の中から生み出された平成傘福が単に女性や観光客向けの土産品としてのみ流通しているのではないという事実である。それはすでに酒田市あがての祭礼やイベント、一部は家庭のひな祭りのなかにも組み込まれながら地域の人々の生活の中ですでに新しい伝統を形づくっているのだ。

ここであらためて伝統傘福の二系統について確認しておこう。酒田地方の傘福には「祈願系」と「祭礼系」の二系統があることはすでに指摘したとおりである、前者は安産や子どもの無事成長を祈って寺社に奉納された傘福であり、後者は山王祭りの山車（亀笠鉾）に据えられた宝づくしの傘鉾である。傘福事業を立ち上げ平成傘福を世に送り出した女性会はこれら二系統の吊るし飾りの伝統に依拠しながら、他地域の吊るし飾りや手芸細工のテキストなども参考に、現在の市民や観光客向けの新しい傘福を創造した。祈願系の傘福が庶民の民間信仰をもとに女性によって作られ奉納された切実な祈願のための一種の民具であるのに対し、祭礼系のそれは酒田の産土神の一大祭礼である山王祭りの壮大な渡御行列に登場する本間家奉納の華麗な傘鉾飾り（亀笠鉾）を原型としている。

祈願系の伝統傘福は子授けや子育て、五穀豊穰などを願って地域の女性（檀家、氏子）によって手作りされ寺社に奉納されてきた。傘福には五穀豊穰や無病息災、延命長寿、そして夫婦和合と子宝、子どもの健康成長などを象徴する様々な細工物が、時には奉納者名（あるいは講名）の短冊とともに吊るされている。定まった種類や個数はとくになく、地域ごと寺社ごとに多様な傘福の存在が確認されている。これらの祈願内容や形象化、奉納行為はわれわれに絵馬の信仰習俗を想起させる（注4）。

これに対し祭礼系の伝統傘福は、これまでもその来歴について地元の文献資料や日本画資料などをとおしてたびたび言及されてきた。地元ではこの祭礼系傘福の起源についてかつて山王祭りの花形山車として巡行していた亀笠鉾であるとされている（注5）。この祭礼系傘福は傘の周りに幕をめぐらせ骨の先端から糸を垂らして多くの細工物を吊り下げる点で祈願系の傘福との基本的共通項が見られるものの、細工物の素材の高級感や高度な技術、細工物の数や種類の少なさなど異なる点も多い。本間美術館に展示されてきた酒田を代表する鶴岡・風間家旧蔵の「傘福」や、近年、同種の古いミニチュアの傘福飾りが市内の旧富裕層の民家で発見されているという状況から考えると、祭礼系傘福は山王祭りの亀笠鉾を原型としてその豪華なミニチュアがごく一部の富裕層の家で飾られていたと想像される。それは祭礼山車の飾り物としてばかりでなく家格や富のシンボルとして飾られていたと推測されるのである。

以上の二系統の伝統傘福の特徴を対比的に整理すると以下のようにまとめられるかもしれない。

## 二系統の伝統傘福の特徴

| 特徴 \ 系統 | 祈願系傘福                      | 祭礼系傘福        |
|---------|----------------------------|--------------|
| 性格      | 神仏祈願の民具                    | 祭礼の造り物、飾り物   |
| 設置場所    | 寺社の堂内                      | 個人宅の居間       |
| 対象      | 神仏                         | 来訪客（ハレの日）    |
| 生活時間類型  | 日常（ケ）                      | 非日常（ハレ）      |
| 細工物の内容  | 五穀豊穡、子宝祈願、子どもの健康・成長、病気治癒ほか | 商売繁盛、吉祥物ほか   |
| 設置方式    | 天井から吊るす                    | 台座に立て床の間等に飾る |
| 作り手     | 家庭の女性                      | 専門の職人        |
| 材料      | 普段着の端切れなど                  | 絹、ちりめん布など    |
| 全体の雰囲気  | 質素、切実さ                     | 派手、祝祭性       |

（筆者作成）

以上のように見てくると祈願系、祭礼系の二種類の傘福がそれぞれ異なる階層や生活の文脈の中から生まれてきた伝統であることが推測される。平成傘福はそのうちのどちらかを排他的に継承するというわけではなく、両者の特徴、要素を巧みに組み合わせて作られている。たとえば外観や布の色目の華やかさは祭礼系傘福の特徴を引き継ぎ、細工物の種類を女性の趣向に合わせている点や民芸的な手作り感は、祈願系につながる。細工物の種類全体としては、祈願系の細工物と祭礼系の細工物の両方が取り入れられている。このような平成傘福に見られる二系統の伝統の融合性や継承性からは、ホブズボームらの指摘にあるような古い在来の伝統的要素を巧みに流用する創造や再構築の技法が見出される。

またこの傘福伝統の創造過程に関しては、モノとしての傘福それ自体だけでなく、傘福の用途やその文脈における再構築の実態も見られる。それは酒田のひな祭りイベントへの傘福の取り込みである。平成傘福はひな祭りイベントに組み入れることによって、あるいはそれとの深い結びつきの中で生み出された新しい伝統手工芸品であった。平成傘福は酒田のひな祭りの関連習俗として紹介されている。しかし祈願系の伝統傘福にせよ祭礼系の伝統傘福にせよ、本来それらが位置づいているのはひな祭り（初節句祝い）行事の文脈ではない。前者は季節性のない民間信仰の文脈であり、後者は雛節句とはまったく異なる神社例祭という文脈である。一部に節句行事の飾り物としての用途も伝えられるが、それは過去のほんの一握りの豪商や網元の間の慣習であり、少なくとも一般庶民のひな祭り習俗としては存在しなかったと考えられる。これら二系統の伝統傘福は観光振興の事業のなかでそれぞれの二つの文脈から切り離され、ひ

な祭りイベントという新しい（再構築された）伝統の文脈のなかに組み込まれていったのである（注 6）。傘福事業により生み出された平成傘福はそれ自身だけでなく用途やその文脈に関しても古い伝統的素材、要素を流用しつつ再構築されており、全体として新しい伝統の流れ（伝統の創造）を形作っているといえる。

#### 4. 傘福調査の開始

平成傘福の場合、柳川や稲取の吊るし飾りのそれに比べてひな祭り習俗との関連や二系統の伝統傘福との関連性などにおいて曖昧な部分が残されていた。ひな祭り習俗とのつながりに関してはかつての本間家など豪商宅の雛人形飾りに添えられていた傘福（「傘鉾」）の事例などが知られているが、一般庶民のひな祭り習俗の中に同様の傘福を飾った明確な証拠は見出されていない（注 7）。また平成傘福それ自体の形態や意匠に関しても、「祭礼系」、「祈願系」の二系統の傘福がそのなかに併存する実態から、各々の伝統傘福との単純な連続性を主張しがたい状況がある。女性会がプロデュースした平成傘福をめぐるこれらの連続性や民俗性の課題は、毎年、発展、拡大する事業の中にあって常に懸案事項としてあった。観光ひな祭りとタイアップして始まった傘福事業は、柳川、稲取の吊るし飾りを伴う観光ひな祭りに比べると後発の事業であるといえる。柳川のさげもんめぐりは平成 7 年に、稲取の雛の吊るし飾りのイベントは平成 10 年にそれぞれ始まっており、平成 17 年からの傘福事業はそれらの先行事例を意識せざるを得ない状況の中ですすめられたのである。いずれにしても女性会のメンバーの間にはかねてより二系統の傘福伝統についての理解を置き去りにしたまま傘福事業を進めることへの懸念が共有されていた。

関係者によると初年度の傘福事業はまさに手探りの中で進められた（注 8）。歴史的、民俗的知識の考証は一般通説や文献にもとづく程度で、事業の主眼は傘福（習俗）の正確な理解よりも柳川や稲取の吊るし飾りに対抗し、たとえばその数量的迫力によって、とにもかくにも地元や全国に向けて酒田の吊るし飾り傘福の存在感を示すことであった。その後も伝統傘福についての正確な歴史考証や民俗的検討の必要性を認識しながらも、とりあえずは事業の維持と傘福の普及に努めることを優先し、伝統傘福に関する探索は留保された状態が続いた。歴史性、民俗性に関する不安を抱えたまま突き進む傘福事業を内省的に振り返り、その客観的知識や理解を踏まえた堅実な取り組みを目指して女性会の有志による祈願系を中心とした「傘福調査」がスタートする。女性会では主に祈願系の傘福を中心とした調査を行った（注 9）。

平成 22 年の夏、酒田市全域を対象とした傘福調査が開始された。同年メンバーの一人（村上弘子氏）はあらかじめ庄内札所三十三霊場巡りの開創 300 年記念御開帳の機会を利用し、各お堂で傘福の存否や状況などを確認している。そうした予備情報をもとに酒田市中、郊外集落にある傘福の実態調査が行われた。有職婦人からなる調査グループのため、週末を利用して毎週のように行われた。調査は工藤氏（前出）からアドバイスを受けながらおよそ半年にわたり実施された。調査メンバーは酒田市域のほとんどの寺社をピックアップし直接出かけては、傘福の存否、保存状態、細工の種類、制作時期等に関する詳細な資料を作成していった。半年で踏査した寺社は 220 件余にのぼり、うち 65 か所で傘福が確認された。制作時期は明治期から

平成まで幅広く確認されており、最近も祈願系傘福（習俗）が維持されていることが確認されている。調査結果は地図上にマッピングされ傘福の分布図も作成された。収集された資料は調査シートに項目ごとに整理され、写真や住職、住民のコメントなども付された。非専門家の仕事とはいえその調査手法は実証的かつ体系的で、民俗資料としても第一級の貴重なものとなっている。その成果の一部は商工会議所の事業報告会で報告され、また「山王クラブ」の第7回傘福展示においては傘福分布図の披露がなされた。こうした調査活動を受けて平成22年11月に「庄内傘福研究会」が発足する。会員12名のうちの主要メンバーは傘福調査のメンバーと同じであり、それまでのインフォーマルな調査グループが公式な研究団体として組織化されることとなった（注10）。

傘福調査は資料の整理なども含め仕事を持つ女性会メンバーにとっては多大な労力と時間を費やす活動であったが、伝統傘福の現状のみならず地域社会の現状を知る上で貴重な機会となった。資料館や文献でしか見ることのなかった実際の奉納傘福を目の当たりにし、またその信仰を生きている人びとの話を聞くことで、単なる情報収集に終わることなく同じ酒田の住民として傘福とともに生きる人びとの姿や声に触れることになった。集落の人びとの語りから、メンバーたちは共同で行う制作、奉納の仕方からは地域の緊密な人間関係について、また傘福の短冊に記された過去の奉納者の名前からは祖先や世代をこえた人のつながりについて考えさせられたという。それは古い傘福を修復し再奉納する活動においてさらに実感することになる。こうした女性会のメンバーたちの調査活動のすぐ先にはすでに地域学／地元学の背中が見えている。

## 5. 傘福の修復、復元活動

傘福調査（「傘福研究会」）のメンバーは、調査活動のみならず古い傘福の修復や復元活動も積極的に行っている。そこには文化資源の保存や伝承という目的だけではなく、観光資源の確保という実地的な目的もある。伝統傘福のうち祭礼系の「傘鉾」に関してはこれまでも工藤氏が中心となって保存、修復に取り組んできた。近年、酒田の複数の旧家からは本間家に伝わる有名な宝づくしの「傘鉾」につらなる「飾り傘鉾」が発見されている（「酒田あいおい工藤美術館」所蔵）。こうした発見の背景のひとつに近年の平成傘福の市民社会への浸透が考えられる。それまで気にもとめられてこなかった旧宅の傘鉾に人びとの関心が向かうようになった所以であろう。ちなみに報道された最近の発見例としては以下の3件が報告されている。これらの発見は偶然というよりも傘福事業によって市民の傘福への関心が高まり、自宅にある古物の傘福を振り返る機会がもたらされた結果と考えられる。工藤氏はこれらの傘福の考証のみならず修復、復元にも取り組みつつ、伝統傘福の二系統のうちの祭礼系の傘福に関して考証を重ねている。（以下、『庄内日報』、同電子版、『山形新聞』記事など）

①2007年3月市内中町小野家の「飾り傘鉾」（幕末～明治期）

（＊持ち主は近年の傘福への社会的関心の高まりから所蔵品の鑑定を依頼した。）

②2007年4月市内栄町菅原家の「飾り傘鉾」（明治期）

(※傘鉾は 67 歳の御主人の幼少期、雛人形や五月人形とともに飾られていたという。)

③2011 年 3 月市内飛島斎藤家の「飾り傘鉾」(天保 5 年)

(※元網元宅での発見から「飾り傘鉾」が富裕層の財であったことをうかがわせる。)

一方、工藤氏を中心とする祭礼系の傘福修復活動に対し、主として女性会が取り組むのは傘福調査の対象であった祈願系の傘福の修復である。以下 2 件は傘福研究会が活動を行った事例である。(以下、『庄内日報』記事、同電子版、『山形新聞』記事および女性会メンバー、工藤氏からの聞き取り)

①市内田沢地区「小平神社」の傘福修復

ここの傘福は傘福調査の過程で見出されたものである。平成 23 年 4 月段ボール箱に入った「お焚き上げ」を待つばかりの傷んだ傘福が発見された。宮司はそのあまりの傷み具合に廃棄を決めていた。その後の再奉納などももちろん期待も予想もしていなかった。女性会では奉納期日(昭和 23 年)が記されており細工物の珍しさもあったため、氏子たちの了承を得た上で修復、復元させてもらうことになった。古い布を使いほつれた糸や破れた布を直すだけにとどめ可能な限り昔の面影をのこすよう作業した。翌年 1 月地区の塞ノ神祭りに合わせ再奉納された。住民たちは美しく生まれかわった傘福を驚きの表情で見上げ、なかには細工物に付けられた奉納者の短冊に自分の祖母の名を見つけた女性がおもわず涙をながす場面もあった(工藤氏談)。修復された傘福によって人びとはあらためて地域の古い記憶や伝統の再生に思いをはせることとなった。

②市内日吉町「光國寺」の傘福修復

同じく女性会(「傘福研究会」)のメンバーによって大正期の制作と考えられている朽ちかけた傘福が発見され、その修復、復元が行われた。本尊の置かれた観音堂に長く下げられていたが、住職も奉納時期や奉納者についての記憶がない。それだけでなく傘福自体に対してもさほど関心がなかった。女性会のメンバーに尋ねられてようやく意識的に見るという本堂の再建時(大正 4 年)に奉納されたと思われる一対(二本)の傘福のうち、痛みが激しい一本はすべて破棄されることになった。かろうじて往時の姿をとどめる残り一本が修復の対象となった。残されたパーツを参考に、それぞれ 12 本の糸に 7 個ずつの細工物をさげ修復と復元が行われ平成 23 年 11 月に傘福研究会の手で再奉納された。

これらの修復、復元活動の目的や期待として語られていることは、地域の伝統資源の意義再評価、発掘や継承、など一般的な伝統尊重の見解である。たとえば「伝統を大切に守り続けてもらいたい。」「奉納した人たちの願いがこもった傘福を後世に残したい。」「傘福に込めた女性たちの願いがよみがえる。」といった事柄であるが、一方で「酒田の伝統の傘福をできるだけ多くの人びとに見てもらいたい。そのために観光ルートに組み込んでももらいたい・・・」といったように観光資源としての活用を指摘した語りには、商工会議所の事業活動としての目的が

うかがわれる。

## 6. 地域学／地元学への歩み

女性会の傘福事業は調査活動を組み込むことでそれまでの事業とは異なる性格を持つことになった。調査活動は事業推進のための単なる情報収集活動ではなく実証的な探求と学びの実践をとまなうようになった。後期の傘福事業は観光振興のための戦略事業という枠を超えた地域の文化資源に関する自主的学びを基礎にすえた実践的地域づくりへと姿を変えていく。こうした傘福事業は、近年の地域学／地元学の運動を想起させるものである。女性会はすでに酒田市の地域学／地元学へ向けた歩みを始めているように思われるのだ。

地域学／地元学は、日本各地を舞台に展開しつつある地域住民主導の地域活性や地域理解にかかわる多様な実践あるいは運動である。地域固有の生活課題や自然・文化環境を前提にした実践であるがゆえに、目的や方法もそれぞれ異なり地域学／地元学の内容を統一的に定義したり捉えたりすることは困難とされる。その中で全国の地域学／地元学をひろく概観しながらその動向や社会的意義について生涯学習論の立場から論じる廣瀬隆人は「地域に住む人びとが、生活している場であるまちを歩き、地域とそこに住む人びとの暮らしを調査し、その過程を通じて地域の良さや課題を発見する。そしてより良く暮らしていくための工夫や課題解決の方法を提案し、行動する。こうした調査研究を軸にした一連の学習活動や地域づくりの営み」（廣瀬 2007、p76 から一部略）を地域学／地元学であるとし、とくに住民自身による調査研究と地域づくりの二つの実践の軸を提示している。また地域学／地元学に共通する「～学」の自称の由来を「実証的・科学的アプローチにより、調査研究の視点を大切にしながら活動を選択した」

（p 77）点に求め、実証的・科学的調査研究が共通に意識されていることを指摘している。さらに都市型地元学として早い時機に立ち上げられた「金沢学」を観光文化との関係で論じている本康宏史は、地域学／地元学が「観光」をめぐる文化資源の発掘、発信のいわば知的バックボーンであり、また「観光」を主体とした地域振興や活性策に対する、一定の批判的な視座を確保する理性の枠組みでもあるとして、それが地域活性ツールとしてはたらくだけでなく活性事業に対する批判的視点を持つ点を指摘する（本康 2011、p 160）。女性会の傘福調査および傘福事業はこうした地域学／地元学の実践にそのまま重なり合う性格を持っている。傘福事業はその中に調査活動を組み込むことで自分たちの地域文化や社会に関する科学的で相対的な視点を確保することになった。それは女性会の傘福事業が思い込みだけの「お国自慢」や自文化中心的な「郷土礼賛」に流れることを防ぎ、客観的証拠や批判的視点にもとづく地域文化の評価や活用に道を拓くことを可能にしている。

伝統はその時々々の社会状況に即して創造と再創造を繰り返しながら継承される不断の生成過程である。傘福は不断に生成される伝統の先端に位置づいているといえる。「酒田祭り」やひな祭り習俗における平成傘福の浸透具合から見れば、それはすでに「創造された伝統」から「生きられた伝統」へと移行しつつある。もはや伝統傘福との厳密な意味での不連続性や平成傘福の目的的な再構築の事実がその価値を損なうことはない。平成傘福の成立過程に関しては地元の人間なら多くの人が知っていることであり、伝統傘福との不連続性やそれ自身の創作性ゆえ

の否定的態度は見られない。平成傘福の価値を減ずるとすればむしろその不連続性を客観的に、またこれに関連して平成傘福が新しい創造物であることを明確に説明しないことの方であろう。二系統の傘福の伝統を融合して成立した平成傘福の場合、それら伝統との純粋な連続性を強弁するのではなく不連続性や創造性を客観的に説明することこそが新しい伝統としての正統性と持続可能性の確保につながると思われる。実証的手続きをもって進められる傘福調査はそのための必須の手続きなのである。新しい傘福伝統の正統性は根拠の希薄な連続性の語りからではなくむしろ客観的根拠にもとづいた不連続性と創造性の明確な説明によってもたらされると考える。

女性会の傘福調査は平成傘福と伝統傘福の関係を客観的に説明するための知識収集の役割から、単なる機関事業の枠を超えた地域学／地元学へと発展させる実践的知の形成の役割を帯びつつある。事業から調査への知のフィードバックは、再び調査から事業へのフィードバックに向かう。事業も調査もつねに未完のものとしてあるからだ。傘福調査のメンバーたちのこのような眼差しの往還は地域文化をめぐる活用と探求の持続的な循環をつくり、いつか酒田市の総合的な地域学／地元学の一翼を担うことが期待される。

## おわりに

本論では酒田商工会議所の女性会のメンバーが地域の観光振興を目的に地元の二系統の吊るし飾りの伝統を融合させて創造した「平成傘福」の誕生と、それが酒田市民の新しい伝統和裁細工として定着する過程を明らかにし、それを通して地域に継承されてきた古い伝統が目的的に再構築され、結果、新しい伝統として創造される実態を指摘した。また近年女性会が開始した二系統の伝統的傘福に関する調査活動に注目し、観光振興事業と実証的地域研究を組み合わせた女性たちの取り組みが、地域学／地元学と呼ばれる地域・地方再生のための住民参加型の実践学へと変貌しつつあることを指摘した。

平成傘福はもともと地元にあった祭礼の山車の飾りと安産や子の成長祈願のために女性が寺社に奉納した手作りの和裁細工という用途の異なる二つの系統の吊るし飾りを融合させて創作された。伝統的吊るし飾りとの用途や形態における不連続性を特徴とする平成傘福は、現在酒田の春のひな祭り観光イベントや日枝神社の祭礼において展示され、酒田市の新しい伝統的シンボルとして浸透しつつある。商工会議所の女性会は地元の伝統文化を現代女性の美的感覚によって再構築することによって新しい伝統を創造することに成功したといえる。

女性会の傘福事業の独自性は新しい伝統の創造にとどまらない。女性会は新しい平成傘福の元になった伝統傘福に関する調査部門を立ち上げ、その実証的探求や修復活動に乗り出した。地域の文化資源に対する女性会の探求の姿勢は、平成傘福による観光振興事業を単なる「お国自慢ビジネス」に終わらせることなく、科学的、客観的な根拠にもとづく地域文化の資源化活動へと発展させつつある。地域振興事業と調査事業の二つの柱を持った女性会の活動のあり方は、現在日本のさまざまな地方、農村地域で展開しつつある地域学／地元学と称される社会運動と重ねて合わせて理解できる。地域学／地元学は住民が自分たちの生きる地域の学習、調査を通して地域や文化の固有価値を発見し、ものづくりや生活づくり、地域づくりの実践へとつ

ないでゆくための思想と技法である。それは地域文化に対する客観的で内省的な態度をともなっている点において、地域の文化資源の活用マニュアルとしての役割だけでなく活用そのものに対する批判的な視点も併せ持っており、文化資源を用いた持続可能な地域開発や事業発展を保障する知的バックボーンとなる。酒田商工会議所女性会の傘福事業は伝統を活用するユニークな発想と地域の伝統に対する真摯な探求の姿勢によって、すでに酒田市を舞台とする地域学／地元学として歩み始めているといえる。

＊本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（課題番号 23520989「地域再構築における中高年女性の伝統手芸活動と民俗技術の多様化」基盤研究（C））からの助成にもとづいている。

#### [注]

（注 1）酒田祭りは 400 年以上の歴史を持つ山王社（現・日枝神社）の例祭で、酒田大火以前までは「山王祭り」と呼ばれていた。祭りの魅力は渡御行列の美しさと神宿（とや）飾りの華やかさにあるといわれ、それを楽しみに近郷近在からの多くの見物客が集まった。祭りでは町衆の氏子から頭屋（とうや）を選び神事に勤仕し費用負担も含め祭り全体を取り仕切った。上・下二か所の頭屋にはそれぞれ神宿が開かれ、頭屋は参加者たちの供応や神事にあたってきた。今日、頭屋役はかつての家単位から地区単位の持ち回りに変わり、渡御行列には市の新しいシンボル獅子頭や多彩な趣向の山車が加わるようになっているが、賑やかな山車行列と神宿飾りは基本的に変わっていない。

（注 2）酒田のひなめぐりイベントは市内 11 か所の主要展示施設を中心に開催される。由緒ある豪華な雛人形と吊るし飾りは、美術館、資料館などの展示施設のほか、市の重要史跡に指定された旧家や旧豪商の住宅などで展示され、観光客はそれらの施設を人形や傘福を鑑賞しながら思い思いにめぐって歩くのである。

（注 3）近年の文化動態、伝統継承をテーマとする研究領域において、E. ホブズボーム／T. レンジャーによる「伝統の創造」の概念は刺激的な視点を提出している（ホブズボーム／レンジャー 1994）。なかでも H. トレヴァー＝ローパーによるスコットランド人の伝統衣装タータンチェックの創造過程に関する報告は、モノとしての伝統工芸の誕生をめぐる興味深い例として、酒田の平成傘福の創造過程を見てゆく際の格好の道標を提供している（トレヴァー＝ローパー 1994）。ホブズボームらはその編著の中で英国で古くからあると考えられてきた伝統には、19 世紀以降、意図的に創りだされ制度化されたものが多々あることを指摘した。それは「まったく新たな目的のために、古い材料を用いて斬新な型式の造り出された伝統を構築する」（ホブズボーム 1994、p15）すなわち「旧来の伝統に容易に接木されたり、公式の儀礼、象徴表現、倫理的勧告－宗教や王侯の壮麗さ、民間伝承やフリーメーソン団の慣行（それ自身、初

期の創り出された偉大な象徴的力の伝統)一の豊富な倉庫から借り入れて、案出されたりする」(同 p16)のである。こうした古い素材の操作あるいは捏造は、それが「伝統」としての正統性や過去との連続性を主張するために頻繁に用いられる手法であり、その対象は神話、儀礼、慣習、文物にいたるまで幅広い領域に見いだされている。

ちなみに平成傘福を取り巻く状況は地域文化や地域的アイデンティティを重視した伝統的要素の操作過程が顕在化しやすい環境となっている。たとえば平成傘福が長期間、市内各所に展示される「酒田の雛めぐり」に見られる観光現象は「文化の客体化」や文化の操作過程を検討する絶好の文脈を提供している。また平成傘福の誕生と新しい伝統としての普及の現象に関して、地域商工会議所の一部会(女性会)の地域振興事業という推進主体の限定性や小規模性、活動における明確な目的性や意図性、および短い歴史過程などの特徴によって伝統創造の過程をきめ細かく跡付けることが可能になっている。

(注 4) これらの祈願内容や形象化、奉納行為はわれわれにもうひとつの類似習俗を想起させる。それは日本各地で見られる「絵馬」の信仰習俗である。祈願の内容を小型の板に描いて奉納する信仰習俗のあり方は、板絵と和裁細工の違いはあるものの、祈願の内容を具体的、象徴的に形象化し寺社に奉納するという祈りの基本的方法としてはきわめて類似した習俗であるといえるだろう。こうした祈願系の伝統傘福に関しては女性会の傘福調査によってその実態や現状が明らかにされつつあり、それが現在でも続いていることが確認されている。歴史の古さからすると絵馬の方が早い習俗といえようが、絵馬と傘福を同種の祈願習俗と捉えるならば、それはどのようなきっかけで、なぜ板絵ではなく布の細工物で生み出されたものであるのか、さまざまな疑問も湧いて来るのである。

(注 5) これは本間光丘が京都の祇園祭の傘鉾巡行に触発され、その傘鉾を模倣して宝暦 12 年(1762 年)京都の職人に作らせた豪華なものである。往時の様子は地元文化財の「日枝神社大祭図」や「酒田山王例祭図屏風」などで確認できる。この亀笠鉾は市によって復元され資料館に展示されているが、その家庭用の古いミニチュア飾りは美術館や資料館で見ることができる。

(注 6) ちなみに近年の酒田祭りに登場する平成傘福の山車は、そのまま往時の祭礼系の伝統傘福の姿の復活につながる印象を受ける。しかし、(平成)傘福それ自体が純粋に祭礼系傘福の形態ではないので、祭礼系傘福の伝統がそのままの復活したものとはいえない。平成傘福における伝統的要素の混在性、融合性ゆえに祭礼傘福の伝統をそのままに再現しているとはいいがたいのである。この意味で傘福の山車を再登場させた酒田祭りも、創造された平成傘福を組み込むことによって再構築された伝統的祭礼ということができる。いうまでもなく傘福と結び付けられたひな祭りイベントは新たに再構築された伝統行事にほかならず、そのひな祭りイベントや傘福事業をきっかけに一部に見られるようになった家庭のひな祭りに傘福を飾る現象も、傘福という構成要素の付加によって新しく創造された伝統のひとつということができる。

(注 7) ただし「酒田あいおい工藤美術館」館長の工藤幸治氏は美術館を訪れた数人の客からかつて自分の家で子どもの節句時に傘福を飾っていたとの断片的証言を得ており、今後の確認作業が待たれるところである。

(注 8) たとえば 2 年目の展示に際しては、吊るし飾りに関する事前の現地調査を行っている。女性会の担当者は柳川と稲取に出向き観光協会や旅館組合関係者からその土地の吊るし飾りの歴史や習俗についての聞き取りを行い、また吊るし飾りの作製についても素材や技術などを中心に実践的な指導を受けている。

(注 9) これに対してもうひとつの系統である「傘鉾」に関しては長く地元の文化財保護に関わってきた工藤幸治氏によって資料の発掘や復元が少しずつ行われていた。工藤氏は女性会の傘福事業においても助言役を務めており、つねづね事業における「傘福調査」の必要性を指摘していた人物である。ちなみにこの祈願系の傘福調査が実現した後、工藤氏らは「庄内傘福研究会」を立ち上げ、傘福調査を制度化することになる。

(注 10) 研究会の設立目的は「伝統傘福の調査研究とその伝統の次世代継承」であり、会長の工藤幸治氏ほか傘福事業を主導してきた横山とも子氏、守屋 順氏、村上弘子氏らが会員に名をつらねている。またその事業内容としては、

1. 古い傘福の調査・研究
2. 現存している古い傘福の修復及び制作指導
3. 傘福の歴史的や文化を継承することを目的とした教育機関等への提唱
4. その他、目的達成のために必要とする事業（視察研修等）

などが挙げられている。（山形市民部 まちづくり推進課HP 担当：公益活動支援センターHP <http://www.city.sakata.lg.jp/ou/shimin/machi/koeki/kasahuku.html>）より。

#### <参考文献>

- ・赤坂憲雄 2010『婆のいざないー地域学へー』柏書房
- ・藤田順子 2009（2000）「「傘福」考」『雛の庄内二都物語ー酒田と鶴岡のお雛さま拝見』SPOON の本。
- ・服部比呂美 2008「庄内地方における雛祭りの飾り物ー雛菓子と押絵雛菓子ー」『無形文化遺産研究報告』（第 2 号）pp.264-232。
- ・廣瀬隆人 2007「「地域づくり」で学習し力をつける、次世代を育てる」『農村文化運動』No.184、pp.76-82。
- ・E.ホブズボーム／T.レンジャー1994（1992）『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊國屋書店。

- ・ホブズボーム 1994「序論－伝統は創り出される」E.ホブズボーム／T.レンジャー『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊國屋書店、pp.9-28。
- ・トレヴァー＝ローパー1994「伝統の捏造－スコットランド高地の伝統－」E.ホブズボーム／T.レンジャー『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊國屋書店、pp.29-72。
- ・岩井宏實 2007『絵馬に願いを』二玄社。
- ・本康宏史「『金沢学』と観光文化」井口貢編著 2011『観光文化と地元学』古今書院、pp.160-169。
- ・酒田市企画調整部企画調整課編 2002『酒田の歴史探訪』山形県酒田市。
- ・日本人形協会 2008「庄内ひな街道「日本のお雛さま文化交流会」 in やまがた出羽の國庄内 & 酒田市ひな巡り（庄内ひな街道）」『にんぎょう日本』404号、6月号、pp.40-47。
- ・山崎裕子編 2006『雛の吊るし飾り』三弥井書店
- ・結城登美雄 2011（2009）『地域からの出発』農文協

#### （新聞記事）

- ・『庄内日報』「チーム結成、復活に挑む」（2005年11月6日）、「酒田雛街道が幕開け」（2006年2月26日）（以上電子版）。「台車に載った傘福」（2007年3月30日）、「商売繁盛を願う？ 傘福付いた山車」（2007年4月14日）、「大正初期の傘福修復」（2011年11月29日）、「64年前の傘福よみがえる」（2012年1月8日）。
- ・『山形新聞』「繁盛ぶり示す貴重品 酒田 民家から傘鉾のミニチュア」（2007年4月14日）、「飛島の網元の家から発見 本間家の亀笠鉾ミニチュア」（2011年3月5日）、「64年前の傘福修復 酒田の研究会神社に奉納」、（2012年1月7日）。

#### （その他資料）

- ・工藤幸治 2010「酒田傘福のルーツ」講演資料
- ・傘福くらぶ「湊町酒田の傘福：傘福の由来 100 撰」傘福くらぶ資料。
- ・目黒雅叙園「山形ひな紀行百段雛まつり」at 目黒雅叙園チラシ（目黒雅叙園）。
- ・酒田商工会議所女性会 2012「湊町酒田の傘福その取り組みについて」酒田商工会議所女性会傘福事業資料。
- ・酒田商工会議所「第3回日本三大つるし飾りサミット in 酒田」チラシ（酒田商工会議所）。

#### 【謝辞】

本稿執筆にあたっては、工藤幸治氏（「酒田あいおい工藤美術館」館長・庄内傘福研究会会長）、田中章夫氏（「本間美術館」館長）、横山とも子氏（酒田商工会議所・傘福研究会会員）、守屋 順氏（酒田商工会議所女性会前会長・傘福研究会会員）、村上弘子氏（酒田商工会議所女性会副会長・傘福研究会会員）、大泉公子氏（酒田商工会議所女性会元副会長）など関係の皆さま方には資料の提供など含め大変お世話になった。とくに工藤氏、横山氏、村上氏には草稿の段階で本文にお目通しいただき貴重なご指摘をいただいた。ここに記して感謝いたします。

## Inventing the tradition of *Kasafuku* by women: From tourism promotion to participatory area studies

Ikko SAKAMOTO

As a means of promoting local tourism, the female members of the Sakata chamber of commerce have created a new type of hanging ornaments, Heisei *Kasafuku*, which is a fusion of two local and traditional types of *Kasafuku*. The emergence of a new tradition of crafting small, handmade stuffed figures of silk or cotton among Sakata residents is thus a revival of longstanding local traditions that have been handed down from generation to generation.

This report discusses the newly emerged *Kasafuku* tradition, examining the manner in which local women have combined aspects of two different traditions. The report also reflects on how the steps that these women took to combine tourism promotion with local scientific research are a practical example of local participation in a trend termed *Tiikigaku* or *Jimotogaku* (participatory area studies).

These women started a group to conduct empirical research about the traditional *Kasafuku* types that were the basis for the new Heisei *Kasafuku*. The women's research of the area's cultural resources did not stop at the business of producing Heisei *Kasafuku* to promote local tourism. Rather, it went further to develop an objective, scientific basis for understanding local culture and how to develop local cultural resources.

The dual method of local development and investigation that these women used can be understood as a social movement called "*Chiikigaku*" or "*Jimotogaku*" (participatory area studies), which is currently spreading throughout the regions and agricultural communities of Japan. Through the participatory area studies, residents discover the inherent value of their culture or locality by studying the area in which they reside and linking this to the development of their area, lifestyles, or crafts. This provides not only an objective yet introspective perspective on local culture but also a critical understanding of the utilization of local cultural resources. This in turn provides an intellectual framework that is connected to sustainable local development and the growth of local businesses using cultural resources.